

## 夢幻能の世界 眼に見えぬものとの対話

飯塚恵理人

一 はじめに

夢幻能とはどのような能であるか。横道萬里雄（注一）は、『旅人が名所を訪れる。そこへ里人がやって来る。里人は旅人に、その土地に言い伝えられた物語を聞かせる。最後に里人は、「自分は実は今の物語の中に出て来た何某なのだ」といつて消えさる。すなわち舞台から一度退場するので、これを中人という。旅人が待つっていると、先程の里人が今度は何某のまことの姿で現われて、昔のことどもを仕方語りに物語ったり、舞を舞って見せたりして、夜明けとともに消えて行く。これは旅人の夢だった。』と言う形式の能であると定義している。

夢に現れるものは、鬼・神・死者の幽霊である。そして、鬼・神などは、その存在が信じられながら普通には眼には見えないものと意識されていた。このことは、『古今和歌集仮名序』（注二）の「目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせ」と、あることによっても知られる。仮名序のこの部分に、和歌が「鬼神」を「哀れ」と感動させると記されていることは、貫之が「鬼・神」を人間の感情を持つものと捉えている点で重要であろう。また「幽霊」はかつて人として世を過ごし、現在は

極楽・修羅道・地獄など別の世にいる者が、人の世に還つて来る時にとる形である。したがって成仏してすでに「仏」となったものの「幽霊」もありえる。そして「見えない」はずの鬼・神・仏などが人に現れる際、夢という手段をつかうことは、『梁塵秘抄』（注三）の「仏は常に在せども、現ならぬぞあはれなる、人の音せぬ曉に、仄かに夢に見えたまふ」（二六番）などにより伺われる。

「鬼・神」は眼に見えない。夢幻能はこの「眼に見えない」はずのものをあざやかに舞台上で観客に見せる。夢幻能を鑑賞する上では、この「見えない」はずのものが「見えている」ことが「奇跡」であり、その曲がこの「奇跡」の体験を舞台上に存在する現世の人間（多くは脇の僧）とともに自分も体験しているのだという約束事でありたつていて、これを認識しておくことが大切であろう。鬼・神・幽霊が現れることは、中世の時代であつてもあたりまえにあることと考えられているものではない。ただ、あたりまえにあるはずでないことを「体験した」という説話が多く作られた時代ではあるのだが。この違いは、きちんと認識する必要があるだろう。

実際、能の中では、しばしば幽霊の姿が見えていることを「不思議」であると述べている。そして幽霊の姿を見ること出来る者も、多くは僧侶・巫女・山伏など、特別な修行を積んだ者とされている。『実盛』（注四）の「いかに翁、さても毎日の称名に怠ることなし、されば志しの者と見るところに、お汝の姿余人の目に見ることなし、たれに向かひてなにごとを申すぞと皆人不審しあへり」という詞章は、実盛の化身の姿がワキの他阿弥上人にしか見えないことを観客に知ら

せる詞章である。

では、「幽霊」はなぜこの世の人の前に現れるのか。「幽霊」が人の前に現れるには、現れた先の人に求めるものがあるからである。その求めるものごとに、夢幻能の幽霊が現れる理由について考えて行きたい。

## 二 弔いを求める幽霊

弔いを求めて僧の前に現れる幽霊は、死後もこの世に未練があり、その「執心」故に極楽を求めることが出来ず、成仏出来ないものである。このような幽霊の代表は《八島》(注②)の義経の幽霊であろう。義経の幽霊は「われ義経が幽霊なるが 瞋恚に引かるる妄執にて なほ西海の波に漂ひ 生死の海に沈倫せり」と、死後も敵への怒りを忘れることが出来ず、そのために成仏できないことを語る。この怒りは、前場に「佐藤嗣信 能登殿の矢先にかかつて 馬より下にどうと落つれば」とあり、腹心の部下を失ったことによる怒りと考えてよい。義経の怒りはそれゆえに能登の守教経に向けられ、キリにも「今日の修羅の敵」として教経の名が挙げられる。義経は直接僧に向かって弔いを求めてはいない。しかし、義経の幽霊は「きうせんの道は迷はぬに 迷ひけるぞや 生死の海山を離れやらで かへるやしまのうらめしや とにかくに執心の 残りの海の深き夜に 夢物語り申すなり」と、自らの妄執を僧に述べるために夢を見せているのである。これは一つには義経の幽霊の「懺悔」であり、また弔いを求める行為と考えるとよい。

## 三 この世の幸福な思い出に執着する幽霊

この世に未練を持つて成仏することが出来ないのだが、からと言つて弔いをしいて求めない幽霊がある。これは、この世の楽しい「思い出」に執着して成仏できないもので、例としては《姨捨》(注③)の老女などを挙げることができるだろう。《姨捨》の老女は、「捨てられた」老女である。しかしながら、そこは月がすばらしく美しい場所、しかも仲秋の名月の晩である。風流な人は、夜もすがら屋外で月を眺めて過ごすべき晩であるから、この老女には捨てられたことに関する恨みなどは一切ない。しかしながら、幽霊として現れるのはこの世に「執心」があるからで、この老女に執心があることは「そのいにしへも捨てられて ただひとりこの山に すすむ月の名の秋ごとに 執心の闇を晴らさんと 今宵現はれ出でたり」と述べていることから知られる。では、この老女の「執心」といふと、キリの「思ひ出でたる 妄執の心 やる方もなき 今宵の秋風 身にしみじみと 恋しきは昔 偲ばしきは閻浮の秋よ友よと 思ひ居れば」と、この世の秋の素晴らしさと月を共に観る友への執着となる。月への執着については『無名草子』(注④)にも「さてもさても、何事か、この世にとりて第一に捨てがたきふしある。おのおの、心におぼされむこと宣へ」と言ふ人あるに、「花・紅葉をもてあそび、月・雪に戯るるにつけても、この世は捨てがたきものなり。情けなきをもあるをも嫌はず、心なきをも数ならぬをも分かぬは、かやうの道ばかりにこそ侍らめ。」と描かれる。和歌を中心とする風雅の世界において、「花・紅葉・月・雪」を観る楽しみがもつともこの世を捨て難くさせるとされてい

る。《姨捨》はそのもつとも捨て難いものに執着する老女の亡霊を描いた作品である。但し、この老女はこの世の「幸福な思い出」に執着しているのであり、極楽に成仏してはいないものの苦しんではいない。このため成仏を願うものの僧の弔いを求めないのである。このような「幸福な思い出」に執着する幽霊としては《井筒》(注8)の有常女なども挙げられる。

#### 四 人が仏となつて現れる幽霊

仏教において、仏とは、人が悟りを開いて「成仏」するものである。『梁塵秘抄』(注9)には「仏も昔は人なりき、我等も終には仏なり、三身仏性具せる身と、知らざりけるこそあはれなれ」(二三三番)とあるが、これは仏になることが出来る「素質」即ち「仏性」がありながら仏道に励まないことを歎く内容となつている。「仏」はもと「人」であり、それ故に人の心が分かるものと意識された。そして、「仏」となつたものは再び自分が「人」であつたときに「縁」のあつた人を悟りに導くためにこの世にもどつて来る。『一言芳談』(注10)には「ある人云く、「真実に往生せんと思はば、人をもかへりみず、物にもいろはずして、たゞ念仏すべし。利生は還来穢国を期すべし。」とある。世間のためになることは、仏となつてもう一度この世に帰つてきてやればよいとする考え方がこのパターンに属する能としては《清経》(注11)が挙げられるだろう。清経は妻の「恨み」を捨てさせるために現れている。清経の妻は、清経が入水自殺したことを恨んでいるのだが、「恨み」はそれさえなかつたならばこの世は幸せだつ

たと思うという意味で、この世の幸せへの執着に通じる。妻はこの気持ちを持つ限り成仏できない。清経は「まことは最期の十念乱れぬ」と、入水の前に念仏したことによつて、成仏して仏となつてゐる。清経は「仏」となつた後、妻の夢枕に立つて「恨みをおん晴れ候へ」と述べ、宇佐八幡の平家滅亡の告げについて語るのだが、これは妻が恨みを捨てることによつて悟りを開き、成仏するように導こうとする行為に他ならない。そして妻が成仏して夫婦ともに仏に成ることによつて、清経夫婦の二世の契りは完結するのである。妻が清経の入水に至る過程を聞いて「恨めしかりける契りかな」と、清経の死は避けられないものであり、二人はこの世の縁が薄い「運命」であつたと納得するのは、妻が悟りに導かれる効果のあつたことを示している。

#### 五 まとめ

能の幽霊は、この世を去つた人であり、人としての感情を有している。過ぎ去つた人生はこの幽霊によつて無縁のものではなく、現在の幽霊の境遇を決定している。修羅道・地獄に堕ちたものも、成仏したものも、すでに次の「世」を過ごしている。そして次の世の「果」を受けた立場で、この世に還つて来てその「因」を語る。これが夢幻能の語りの内容となつてゐる。夢幻能の幽霊は、様々な「この世」を過ごし、その「果」を受けた。それ故に幽霊の語りかける物語も曲により同じ物は一つもない。その幽霊がなにを求めているのか、夢幻能を観る上ではそれにも留意すべきであろう。

(注)

- 1 『謡曲集 上』 横道萬里雄 表章校注 日本古典文学大系40 岩波書店 昭和35年12月発行 7頁
- 2 『古今和歌集』 小島憲之 新井栄蔵校注 新日本古典文学大系5 岩波書店 1989年2月発行 4頁
- 3 『和漢朗詠集 梁塵秘抄』 川口久雄 志田延義校注 日本古典文学大系73 岩波書店 昭和40年1月発行 347頁
- 4 『謡曲集 上』 注1 267頁
- 5 『謡曲集 下』 伊藤正義校注 新潮日本古典集成79 新潮社 1988年10月発行 329-341頁
- 6 『謡曲集 上』 伊藤正義校注 新潮日本古典集成57 新潮社 昭和58年3月発行 237-244頁
- 7 『無名草子』 桑原博史校注 新潮日本古典集成7 新潮社 昭和51年12月発行 15頁
- 8 『《井筒》と中世『伊勢物語』古注釈 「待つ女」等の解釈を通して』 拙著『夢幻能の方法と系譜』所収 雄山閣 平成14年3月発行 183-203頁
- 9 『和漢朗詠集 梁塵秘抄』 注3 385頁
- 10 『一言芳談』 小西甚一校注 筑摩書房 1998年2月発行 144頁
- 11 『《清経》試解 げにも心は清経が仏果を得しこそ有難けれ』 注8 125-141頁

### 著者紹介

飯塚恵理人(いいつかえりと)。  
椋山女学園大学文化情報学部  
助教授。専門は中世日本文学  
及び能楽。最近は夢幻能の成  
立に関心を持っている。趣味  
は昼寝と写真撮影。家では二  
人の子供を大切にしている。